

第15回銀華文学賞発表

銀華文学賞

第一五回銀華文学賞は、日本全国及び海外から、二〇九篇の御応募をいただき、まことにありがとうございます。国際色も交わり、また先端技術世界も反映されて、今年も多彩な内容となりました。

予選選考を終った作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに結果を発表させていただきます。

作品は、誌面の都合により、今号は最優秀賞と優秀賞の一部のみを掲載させていただきますが、奨励賞など秀でた作品は次号以降に順次掲載の予定です。

申し訳ございませんが、コロナウィルスの影響が尾をひいた事情から、授賞式・祝賀会は今年度も見送らせていただきます。賞状・賞品などは後日直接御本人宛てに送らせていただきますので、御了承ください。

なお銀華文学賞は明年も年齢を四十歳以上に繰り下げさせていただきます、枚数、締切、審査料など他はすべて同じとして募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちしております。

最優秀賞

「父の回心」

戸塚邦子（東京都港区）

「ぬくもり」

長野正毅（東京都杉並区）

優秀賞

「無垢なる子宮」

西村修子（山口県宇部市）

「ブレイクスルー」

塩崎憲治（山形県米沢市）

「雪かき男」

青木ガリアン（北海道札幌市）

「妻のVIT」

菊野 啓（徳島県徳島市）

「震災を越えて」

高橋惟文（山形県山形市）

「上山宿始末」

小笠原新（山形県酒田市）

奨励賞

「テロの源流」

風樹 茂（東京都荒川区）

「双眼鏡」

松本りゆうじ（東京都練馬区）

「大回り」

高杉晋太郎（大阪府豊中市）

「一粒の実りを願って」

庄ユリコ（USA ヴァージニア州）

「ゲームの行方」

四方康嗣（東京都杉並区）

「雨女」

室町 眞（東京都杉並区）

「独り、壊れていく」

高橋ひとみ（千葉県船橋市）

「弁才天マヤミ」

永田祐司（兵庫県西宮市）

「オムライス」

秋野佳月（埼玉県北足立郡）

「マジックヒューズ」

山田 明（千葉県流山市）

「ゴーストバスター」

中野雅丈（大阪府大阪市）

「青春の彷徨」

折口 真（埼玉県所沢市）

「瑠璃の家」

松本昂幸（東京都世田谷区）

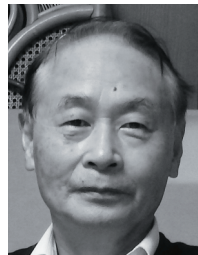
佳作

- 「髪あらい」 和田さとし
- 「怪雨」 中崎紫紅
- 「Boy hits the Bank」 柵木拾五
- 「沈下橋」 諏訪崎はるえ
- 「夜の訪問」 宮脇すみれ
- 「七月のカモメ」 林野浩芳
- 「満洲補充読本」 朝川あきら
- 「娘との和解」 谷口俊明
- 「引き出しから蝶が飛びたつ」 松下 卓
- 「弔問」 安芸木菟
- 「セピアの溪」 根岸幸晏
- 「無償の愛」 飯塚久美子
- 「黒い森、あるいはミハイル・アレンスキーという男」 土屋 慶
- 「巡礼」 あおいなつ
- 「裸木の願い」 涼山 晃
- 「バイバイ、グッド・ラック」 国梓としひで
- 「雫の祈り」 ユラン
- 「家族のホゾ」 阿鳥美央
- 「いつか どこかで」 待木 啓
- 「春の浅い夢」 奥村郁雄
- 「カルメンさんのドライブ」 北原 岳
- 「橋柑匂う頃」 吉田宏子
- 「天国の扉」 米蔵
- 「大津絵」 伊吹耀子
- 「百鬼夜行」 夏目由美子

選評

層が厚くなった

五十嵐 勉



今回の銀華文学賞は、層も一段と厚くなり、読み応えがあった。この充実は、人生を省察する年代層の、成果ある方向性が定まってきたような印象を与える。銀華文学賞の大きな果実の一つを得つつある気がした。特に優秀賞、奨励賞レベルの層の厚さは、それを物語っていた。

当選となった最優秀作は、二作あり、どちらも大きな人生の巡りののちに到達する深い輝きを獲得していた。

戸塚邦子氏の「父の回心」は、商社マンとして海外で長く働く父親の、キリスト教への回心を辿る物語である。当初「私」は、日本に残した家族を顧みず企業戦士として働く父親への不満を大いに覚えていたが、回心して出世コースを降りた父親の変節に寄り添っていく。帰国後さらに痛に倒れ、末期の病床での看護の会話のうちに、どうしてキ

銀華文学賞選考委員プロフィール

- | | |
|---|---|
| <p>大高雅博 —————</p> <p>おおたか まさひろ</p> <p>1954 石川県生まれ 日大国文学科卒</p> <p>80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞</p> <p>他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など</p> | <p>小浜清志 —————</p> <p>こはま きよし</p> <p>1950 沖縄県生まれ</p> <p>劇団四季など様々な職を遍歴</p> <p>87 作家中上健次に師事、マネージャーを務める</p> <p>88「風の河」で文学界新人賞を受賞</p> |
| <p>八寛正大 —————</p> <p>はっかく まさひろ</p> <p>1952 東京生まれ</p> <p>早大理工学部数学科・都立大仏文科卒</p> <p>91「十二階」で新潮新人賞受賞 文藝学校・NHK 学園講師 主著「『シュルター』発」（けやき出版）『夜光の時計』（新読書社）詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』（共に洪水企画）</p> | <p>五十嵐勉 —————</p> <p>いがらし つとむ</p> <p>1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒</p> <p>79「流論の鳥」で群像新人長編小説賞受賞</p> <p>84-90 タイ在住、カンボジア問題取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長 主著『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』『ノンチャン、NONGCHAN / 聖丘寺院へ』『破壊者たち』</p> |

作家集団「塊」新メンバー募集中

連絡 090-8171-9771

リスト教へ回心したのかその過程を明らかにしていく。そして父の死後、回心した現場のシリアの鄙びた協会を訪れて、そこに残された芳名帳に、何十年も前の父の真の言葉を発見する。遠い異国の地に年月を経て見出した肉声は感動的である。時空を隔てて思いは伝わり、新たな心の絆を得て人生の力となっていく、文学の原点をも示してくれる優れた作品となっている。

長野正毅氏の「ぬくもり」は、青春の輝きと挫折を人生のぬくもりとして抱き締め直す、その姿形の結晶感が素晴らしかった。ロックバンドに夢を賭けて活躍する主人公に、憧れを抱いて近寄ってくる少年との、夢のやりとりのうちに、やがて挫折して平均的なサラリーマンになっていく自分に対し、逆に音楽から離れて世間的な成功を得、羽振りよく昔のロック喫茶に出入りする二人の心理的な隔たりが、人生の深い溝を覗かせている。燃えた昔の懐かしさが、いきなり「抱き締める」という奇矯な行為によって爆発し、実現する。それはその行為によってしか成し遂げられない、人生への遡及であり、夢に賭けて生きた者同士の、過去の絆であり、「ぬくもり」にほかならない。「彼」と「少年」で最後まで押し通す工夫も含めて、長野氏の高度な技量によってのみ可能な結実を見せていると同時に、何十年という日々の積み重ねを経たのちにこそ初めて、その真の輝きを知ることができる、人生の妙味をも覗かせている。

わかるが、それ自身の方向性や意味に触れていないのが、会社への忠誠度の枠に留まって、スケールの広がり小さくなっている点である。それが最後の感動に高まっていかない惜しい読後感をもたらしている。タイトルもカタカナの分、弱くなった。しかし相変わらずの力量は十分感じた。

同じく安定した力量を示したのは、菊野啓氏の「妻のVT」である。これは設定が斬新でおもしろい。神経の難病に罹って寝たきりになった妻のために、遠隔カメラで外の世界を見せる、現代でなければできない視覚の旅が試みられる。「私」が車を運転し、隣の高橋氏の頭にカメラを付けて、そのカメラに映る画像を寝たきりの妻が見て、バーチャル旅行をする。同乗者は日本語が話せる、雇われベトナム人で、そのヘッドに付けられたカメラに映る画像をそのまま妻が見て応答する、奇妙な臨場感が醸し出される。

外部の新鮮な世界に画像を通して触れ、また四十年前に訪れた店に来て、そこで食事をしたりして、過去も新しい力となつて、妻の内部を蘇生させる。決定的なことに、最後交通事故を起こし、自分もベトナム人も九死に一生を得る。それを妻が病床で見ている。それらの事件によって、延命治療を拒んでいた妻が、生きる契機を強く得ていくというストーリーである。原題の「一本杉」が今日的設定にそぐわず、改題してもらったことにはしたが、問題の提起に比べて、結末がやや調和的で弱い点、また交通事故の出来事

今回の応募作品全作のうちで、最も文章の魅力と吸引力

の強さを感じたのは西村修子氏の「無垢なる子宮」だった。描写の綾をちりばめながら快く流れていく運筆力は、ハイレベルの研磨を感じる。むしろストーリーの組み立てがそれに追いついていかない恨みがある。性を遠ざけようとする動機が、父親と後妻との性行為を目撃するそのトラウマにあることは自然なもの、その嫌悪が、父親の車に細工をして二人を死に至らしめるのは、やりすぎで、それが、この主人公の生活的な根拠のなさにも結びついて、現実の根を薄くしている。結末もはつきりせず、やや逃げている印象がある。タイトルも露骨で、奥行きがない。一つ作品を結実させれば、たわわな果実群を生み出せそうな技量と豊穡感を覚えた。

前回最優秀賞に輝いた塩崎憲治氏も実力を発揮した。最優秀賞の次の作品は力が落ちるものだが、今回の作品はそれを感じさせなかった。むしろ題材を「空手」というスポーツに置き、ゲーム会社のクリエイターを主人公にすることによって、前回の野生世界とは全く異なった世界の舞台構築に成功している。現代の素材も創りあげることのできる幅の広い領域を有していることに驚かされる。空手の試合や稽古の臨場感、またゲーム会社内部の直面する問題のリアリティなど、迫真力があり、最後まで一気に読ませている。惜しいのは、ゲーム会社の創作に命を懸けるのは

があまりに大きくて、問題を消してしまうくらいがある点

が、設定の斬新さを薄くしているのが惜しまれた。オーソドックスな筆致の作品も、優秀作の重みを有していた。青木ガリアン氏の「雪かき男」も、ある交通事故を契機に駅付近の雪かきを黙々と続ける男の背景を辿って、奥行きのある構造を築いている。新聞記者の立場から迫る組み立ても、推理と検証を伴って、吸引力がある。最後にすべてが明らかになって、一つの社会問題を含んだ人間の温かみに到達する帰結は一篇の完成を得ている。何かが胸に残る作品である。

高橋惟文氏の「震災を越えて」は、常に安定したレベルの作品を生んでいる高橋氏の中でも指折りのもので、久々の三塁打の印象である。結婚間近のカップルが大津波によって、別れ別れになり、消息が知れないまま、女性は他の男と結婚して、子供まで設ける。しかし互いに未練を消すことができず、男は独身のまま女性を追い続け、女性は離婚する。男が新たに就職した会社の好人物の社長と、男に思いを寄せる女性社員の協力で、女性の居場所がわかり、再出発するというストーリーは、高橋氏ならではのあたたかいヒューマニズムに包まれて、心を結ぶものの成就が胸を熱くさせる。ただ、男に思いを寄せる会社の女性の処理が最後宙に浮いたままになってしまった点、またタイトルがやや大きすぎる点に、このままではベスト作品と言

い切れない未消化部分が残った。修正の上で掲載に踏み切りたい。

小笠原新氏も健在である。江戸時代に舞台を得た時代小説は、手堅い筆致で、最後まで濃密に読ませる。「上山宿始末」に流れるストーリーのうねりは、因果の起伏に富んで善悪・報復の糸を綾織っていく。江戸時代の藩政のあり方や大名行列の宿場の背後の景色など、臨場感も豊かで、生き生きと昔が蘇ってくる点も評価を得た。

奨励賞は、地味な領域を題材にしている作品に、輝きがあった。「大回り」（高杉晋太郎）は破綻した家庭とサラ金やアパート大家の請求から逃れる毎日の惨めな生活の中で、唯一の息抜きが電車に乗って巡る時間という、現代の下に埋もれた実相を描いて、共感が深かった。また「ゴーストバスター」（中野雅丈）は、新聞の校正の作業実態を克明に描いて、活字文化がこのような労苦の上に乗っていることをあらためて認識させてくれた。「瑠璃の家」（松本昂幸）は、義足の老年生活が身に染みるタッチで、晩年の彩の一つを失う翳りを味よく描いている。

これらと根も共有していて、五十代以後の成熟した時期でなければ書けない結実を示して出色だったのは、「双眼鏡」（松本りゅうじ）である。人物の行動の契機が利欲であり、破滅に向かうしかない流れでありながら、なぜか胸に深く残るものがあり、読んだ翌日も、翌々日も登場人物

の存在が脳裏に蘇ってきた。これは悪を犯しながら、その動機に人間として年齢や社会からの阻害に追われていく普遍的な人間の悲しさが底に波打っているからだろう。意外に胸に残るのはやはりいい作品の証左と思つた。

ありそうで意外に書かれていないものに、老人ホームに追いやられる主体者の側の小説である。「独り、壊れていく」（高橋ひとみ）は、周囲からいやいや老人ホームに追い立てられて、そこで次々に主体性を奪われて「壊れていく」老年の一つの姿を、的確に筆にしている。老年にとつての幸せとは何か、あらためて考えさせられた。「弁財天マヤミ」（永田祐司）は、ステージIVの膵臓癌を宣告され、インドで余生をと覚悟して渡航した地で、インド美人のケアと言葉に蘇生されるストーリーは、新機軸も示して、迫ってきた。「雨女」（室町真）は、雨に祟られる女性の運命を軽妙に描いて、切れのある展開が機知を光らせている。「テロの源流」（風樹茂）は塾のベトナム人の同僚英語教師が、南ベトナムの母国が消えて行き場を失くし、その天才的物理学の才能を結局北朝鮮の核開発に投じる過程を描いて、素材の新奇さに鋭さがあった。しかしタイトルは大袈裟過ぎるかもしれない。「青春の彷徨」（折口真）は警察学校の訓練期間を記して、その挫折の中で落ちこぼれていく友を通して青春の影を抽出した。珍しい素材をよくものにした。佳作もかなり惜しい作品、もったいない好素材の作品も多

く、言及したいが、今はすでに触れられないので、批評コメントの希望に託したい。一つだけ、神郷愛光氏の「ハーブの調べに誘われて」は引きこもりの少年がハーブ演奏会に行ったりすることを契機に、積極的な外へ出る過程を鮮やかに書いていて、魅力を感じた。残念ながら他の選考委

入選

「鷹匠」

原口賢治

「青く染め」

切塗よしを

「ドライバースライセス」ながのともこ

「存えて」

白峰 綾

「潮騒〜真琴の純情」

北条かおる

「家族全員・精神科・更に夫婦別居」横田 明

「おやじの嫉妬」

鈴木邦夫

「旅立ちの切符」

友 修二

「結婚しない」

九条之子

「パステル・パーク」

中庭昌樹

「秋子と雀と艦載機」

湖條登四季

「ロッキングチェアとゆりかご」木澤 千

「オンリー・ロンリー」

山本御覧

「ドドンパ」

松本 馨

「カスパの女」

竹中 寛

「夜を往く」

朝比奈豆枿

「JB」

寺内あきこ

「霧のむこうに」

東間征子

「警察署長の手控え帖」

梶川洋一郎

「万劫の花」

小野満志呂

「風を感じたとき」

山崎ゆのひ

「許してやる、と言え」

前岡光明

「ヒゲボウボウの空き地」

天野秀作

「渦」

雨原 歩

「未遂」

沢村 基

「右手」

邑崎龍哉

「雪鬼」

清島美のり

「河畔の家」

鐸木英莉

選評

※今回も力のある作品が多かったため、入選として賞揚させていただきました。

秀れた書き手の存在

小浜清志



毎回驚かされることであるが、こんなにも秀れた書き手が存在していることである。たまたま文壇への切符を得られなかったが、既存の作家と遜色のない方々が現実にいるという事実は日本文学にとつて宝ではないだろうか。長年このような場に立ち会えたことは私にとって至福なことであった。これからも大勢の方が参加してくれることを祈っています。

私の印象に残っている「瑠璃の家」は登場人物と作者の間のとり方が絶妙で、夫から逃げてきた女性の表情すらすぐに浮かんだものである。小学四年になる娘と二人で暮らしている女性は主人公の建築設計の手伝いをしている。どこかで男と女の世界が現れるのかと期待していたが、ある日、別居中の夫が顔を出し、二人の関係をうたがわれる。暴力事件に発展しそうな迫力は素晴らしかった。せっかく五十枚の分量があるのだから作りきればもう少し深みが出たのではないかと思うと残念であった。

当選作となった「ぬくもり」は読みごたえのある展開と構成の技が秀逸であった。夢に生きることのむつかしさと挫折が痛いほど伝わってくる。多くの人が味わったことのある感覚を的確に描写している。作者がこれから出会う何かに感動することがあればその作品はもっと輝きを増すだろう。そして、読みたい。

昨年当選作になった筆者の「ブレイクスルー」は、昨年とはまったく趣を変え、空手にのめり込む坂上をそつなく描いている。どんな材料でも見事な料理に仕上げるコックのように、素材の良し悪しに限らず小説に仕上げる腕を身につけている。

「大回り」は人生の坂道どころがり落ちていく人間を哀しいほどに描いていて心にしみるが、どこかで救いが欲しかった。しかし筆力は確かであるから、身に合ったテーマを捜しあてれば豹変する書き手だと思う。この作品では書き出しの部分は不要ではないだろうか。

「震災を越えて」は何度も目にしたことのある作者でベテランである。歳をとつても作品作りはおとろえることなくきちんと感動を詰め込んでくるあたりは素晴らしい。



今回は豊作

大高雅博



今回は力作が多く、選考はかなりの時間がかかるが、当選作はすんなり決まるかもという気がして臨んだ。

結果的には、やはりかなりの時間がかかったものの、当選作は、僕にはやや意外な結果に終わった。

当選作戸塚邦子さんの「父の回心」は、家族を置き去りにして外国で暮らした父の足跡を辿ることで、そうではなかったことがわかるという話だ。その外国が日本から遠いシリアである。シリアはイスラム国だと思っていたが、首都ダマスカスには聖アナニア教会があり、パウロが回心した場所であるという。父はそこでキリスト教の洗礼を受ける。娘はさらにマアルーラ村、聖シメオン教会等キリスト教に関係ある場所をめぐる。読んでみると行ってみたくなくなるような描写ではある。今回、この評を書くために読み返すと、アレppoという町の名前に気づいた。そして、この小説の年代が一九九六年であることに気がついた。

かなり経ってからシリアは内戦となり、二〇一六年政府軍を支援するロシア軍が反政府軍がいるアレppoを包囲し、これを殲滅した。この時の勝利の経験が、ロシアがウクライナを攻める一つの動機となっている。今はどう変わっているか分からない、より良きシリアがこの小説にはあるのだ。

当選作長野正毅さんの「ぬくもり」は、かなりの腕を持つギタリストだが、上手いはず、挫折をする。ギターを教えた弟子と、その妹には作文を教える。小説は上手だと思う。ただ、主人公は、ギターを捨て単なるサラリーマンになっていて、弟子も羽振りの良い大人になっていて、弟子の妹は死んでいる。皆中途半端のまま、救いがない。そういう小説だからという意見もあったが、弟子の方は、一旦ギターを諦めるがたとえば、妹の死を境にして一念発起してプロのギタリストになったという方向もあったかもしれない。そして、再会した時に言うのだ。「僕は先生ほどの才能はない。だけど、病気があつたという間に亡くなった妹のためにも、僕は輝く必要があつた。だから、先生の何十倍も練習することにした。時間はあつたし、僕は恵まれていたからね。先生に言われたことを思い出しながらね。先生、意外と本気で教えてくれていたんだね」と言うようなことも考えられる。ただし、これでは「ぬくもり」と言う題名は合わなくなるが。

優秀賞塩崎憲治さんの「ブレイクスルー」は銀華文学賞始まって以来の本格的な空手小説であり、塩崎さんの引き出しの多さには感服する。

優秀賞青木ガリアンさんの「雪かき男」は最初の頃、主人公の新聞記者が男かと思えたくらいで、後は文句がつけにくい作品である。点字ブロックの雪かきをする耳の不自由な男を巡る本当に良い話である。

時代物小笠原新さんの「上山宿始末」は何か資料があるのかどうか分からないが、物語としてよく出来ている。とても面白い。

優秀賞高橋惟文さんの「震災を越えて」は震災で別れ別れになった男女の話だが、これもとても良い話だ。この何作か、別のシチュエーションで、かなりの質を保ちながら良い話を描き続けられているには感心する。僕は、個人的には特別賞をあげたい気持ちだ。

優秀賞の西村修子さんの「無垢なる子宮」は問題作。新人賞の「作品」、これから出てくる「一粒の実りを願って」と同じように、男では書けない作品になっている。これは女性から見えてくる性の話で、迫力はある。

奨励賞も力作揃いで、触れざるを得ない。

奨励賞の松本りゅうじさんの「双眼鏡」はピカレスク(悪漢)小説であるが、頭に残る作品。

奨励賞の中野雅丈さんの「ゴーストバスター」は、校閲

最後に触れたいのは奨励賞の室町真さんの「雨女」で、雨に崇られる女性の一生を描いている。面白い発想だし、最後も洒落ている。ただ、選考委員の全てを納得させる作品を期待したい。

以上の他にも面白い作品もあり、今回は豊作だったのだろう。その人にしか書けない場所を見つけた人が多かったのかもしれない。来年も選考委員を悩ますような小説を期待したい。

「気づき」と「受け継ぎ」

八覚正大



夏の猛暑酷暑激暑、それから急に気温が落ち、また好天が続き……一方コロナは姿を変容しつつ、まだ拡大し直そうとしたり……、あり得ないロシアの侵略戦争は延々と意地になっっているかのように続き、壮大な国家と一人の脳との関係(どんな地位についても一個の脳であることに変わりはない)否応なく見せてくれている。……かつて作家集団「塊」で、『チェルノブイリの祈り』を読書会に用いたことがあった。それはホロコーストを扱った例

者の話で、新聞の電子版の校閲で、題材が良い。奨励賞の山田明さんの「マジックヒューズ」は不思議な作品だ。病院の夜間の調理室に勤める男、とキャサリンと呼ばれる看護婦。奇妙に心に残る作品だけど、話が終わっていない気もする。

奨励賞の四方康嗣さんの「ゲームの行方」は、弁護士資格を剥奪された男が、友人の娘が巻き込まれた事件を解決する。設定が面白く、作者は法律の知識があるらしく、それを生かして書かれている。

奨励賞の庄ユリコさんの「一粒の実りを願って」は、アメリカ人と結婚し、「周りのアメリカ人に倣い、ショートパンツを身につけて」「大股でぐんぐん前に進む」というようにアメリカで暮らしている三十七の彼女が、体外受精で子供を得ようとする話である。排卵誘発剤で三十七個採卵できたが、その後、三個ずつ「移植」するが上手くいかず、二回目で、妊娠が確認されたが、十四週で、消えてしまふ。心が折れそうになるが、9・11の自爆テロが起き、再度挑戦し、採卵できたうちのあまり望みがないと思われるたその一つが奇跡的に妊娠し、子供が生まれる。話は二十年後、息子が大学に入学し、家から離れていくことで終わっている。確かに報告書のように、小説であるかと言われると自信はなくなるが、女性にしか書けない切実な小説だと思う。これが僕の今回の本命だった。結果はしかたがない。

例えば『シヨアー』に似て、巨大な事象は一人の見解で覆うべくもなく、膨大な数の関係者の証言を並列させ、後は読者に委ねる形式(それしかない)だった。

群盲象を撫でる……コロナも戦争も、一人の人間が見切れるわけではない。だから想像の飛翔は芸術で広げ、具体的現実行動は科学を用いて着実に——その二足歩行こそ、人類(とその脳)を曲がりなりに着実に歩ませ得るホモサピエンスの智慧ではないか、と考える昨今である。まだ冬にコロナ第八波が懸念される中、銀華文学賞選考会は無事行われた。以下感想を述べておきたい。

「ぬくもり」長野正毅

はじめ、この小説は(一対一で教えるプライベートレッスン)の中で、教える側の現役ミュージシャンの主人公が、一人の少年に興味を持ち関わっていく、マイナーな小説のように思われていた。さもない淡い関り、ヘロクバの店主が、彼と少年をゲイカップルだと勘違いしていた)ような、評者もそんな感覚を捨てきれなかった。しかし、月日は流れ、少年は育ち世に名も出る。そして再会した時、主人公は(軽くうなずき、そのまま戸口とは反対に少年に近づいて……周囲の連中が、突然視界に入ってきた初老の男を怪訝そうにながめ)る中、少年を背後から抱きしめる……。それはラストの感懐に凝縮され、ここで一気にこの小説の姿がマントを翻したように(でも格好良さとは対極

の形で)現れる。(最後の最後は、あんな形でしか表現できない感情が世のなかにはあるものだ。一週間たっても十日たってもひと月たっても。ぬくもりは残されていた。)そしてそれが、淡くも関わった人たちとの(奇跡の恩寵)なのだ気づき、人気のない駐車場で静かに泣く……人生の真の事実に触れた瞬間だ、そして(大きく口を開けるとかえって声を出さずに泣けるのだ)ということ、生まれてはじめて知るのだ。この初老の「気づき」は人生を扱う文学のテーマとして見事に浮上した、田山花袋に触れるまでもなく……。

「父の回心」戸塚邦子

一読して、実に清々しいものを感じた。亡くなった父親は、かつてシリアのダマスカスに単身赴任していた。主人公はアラビア語学習のために在学していた東京の大学院を休学し当地のアラビア語センターに留学する。その一番の目的は父親の足跡を訪ねてみたいという思いからだ。その頃の父親は(仕事第一の家庭など顧みない、いわゆる企業戦士)だと思われていた。

帰国した生前の父親からは、かつてダマスカスで教会に行き、飛行機に乗り遅れた偶然から、墜落したそれに乗れず命が助かったことを聞かされたりする。そして彼の体験とパウロの回心が重なり合い、その教会で洗礼まで受けたことも。一方主人公も、その父の後を辿り、父に導かれて

通して、妻と記憶の旅に出、妻もオンラインでそれに同行しているというわけだ。そして(自分がすっかり忘れ去っていた場所で、細い糸のように連続と続いていた『時間』を、何だか愛おしく思)う。

ラスト、ドライブ中の車は事故に見舞われる。氣を失ったヒエンがしかしなぜか動き夫を助ける、その時夏子は折るしかないと念じつつ、自分の身体がその状況に入り込みヒエンを動かしたという不思議な感覚を持つ。それは(ヒエンの助けを借りれば、夏子は閉じかけた自分の世界を、しばしの間ほんの少しだけでも取り戻せる。……人間の命は有限だが、その思索に限界はないのだ)という主人公の氣付きも促すに至る。どんな状況になっても生きていく意味を模索する——その人間の可能性を描いた出色の快作だと感じられた。

「ブレイクスルー」塩崎憲治

(大手ゲーム会社でノベルゲームのシナリオを描いている)主人公、しかし突然スランプに陥る。(アクションゲームのシナリオライターとして復活するには)何かが必要とを感じる。そして偶然、空手道場に関わることになる。それからとはとにかく空手三昧の境地になり、これでもかと空手に励んでいく、その描写はなかなかだ。ラストは(本格的に空手ノベルゲームの製作が始まった。タイトルは「ブレイクスルー」)暗く長いトンネルの先に、かすかな光が見

当地へ来る。その経緯も瑞々しく描かれ、(仕事優先で子供たちの事など気にも掛けていないと思われる当時の父が、この聖アナニア教会で神に願った事は仕事の成功でも自分の出世でもなく)自分たち子どものことだったことを知り、父親の大きな愛に改めて気づく……それから十年後、主人公は父親の思いを受け継ぐように東京の教会で洗礼を受けるのだった。

「妻のVT」菊野 啓

定年退職し、年金が入るようになった矢先、凶事に見舞われた夫婦の話。妻が神経系の難しい病気に掛かったのだ(ALSか)。そこから、偶然見つけたサイトから不思議な、VRを用いた「試み」に入っていく。それは妻とオンラインでつながりながら、間にその会社で雇っているベトナム人の二十歳の実習生を入れ、彼女と主人公が実際にドライブをし、妻もリアルタイムで関わらせるといったものだった。

その近未来的試みの発想は斬新さを感じさせ、不思議な関係、主人公の回想の瑞々しさなどに惹かれて読み進めた。(ふう、何だか疲れたな。家に隠っていたから足腰が鈍ったようだ)横にいるヒエン(実習生)にこぼしたが、領いたのは自宅にいる夏子(妻)だった。そして、かつて妻と行った「一本杉」といううどん屋へ行く……つまり主人公が、身体的にはヒエンという若い実習女性の身体を

えて来た)と終わる。

「上山宿始末」小笠原新

時代小説、良く調べ、想像力も加味されている。思いのままに女を切り殺す上司と、それを成敗する厳格な侍、しかし彼もまた謀(はか)られ伐られてしまふ、それを息子兄弟が仇討する……という上山宿での凄惨な過去の記録が再現される。刀という手近な武器によって、善にも悪にも凄惨な結末を生んだ時代の話である。結末にこうある。(前の藩主は、信じ難いことだが、自ら手打ちにした数は百四十に上る。斬首、切腹、上意討ちを含めると、……何と三百名余の死者が出た。藩主の聡明さは時に果断となり、癩癩の強さは時に理不尽な過酷さとなって現れた。前者は美談として酒井家世紀に記された。だが後者は、後難を恐れて記者はいなかった。わずかに、「……家日記、……家文書、……聞き書き」等の形で断片的に記されているのみである。……この話は主として池田家文書に拠っている)と。作者の思いが込められている箇所と強く感じられた。

「雪かき男」青木ガリアン

その街には雪かき男と呼ばれる男がいて、彼を取材する女性記者があれこれ立ち回る話。途中まではミステリアスな部分も含め惹かれてはいた。(雪が降ると駅前に見れ雪かきをする男と、その男にしつこく話しかける女。いつしか、この二人を街の人は、「雪かき男と話しかけ女」と

呼ぶようになった」と。しかし、それは歩道の雪かきではなく、点字ブロックの雪かきをしていたのだと分かる。そして、後半絵解きが出て来る。県内で初めての点字ブロック、盲学校、視覚障害を乗り越えようと誓った二人……：そして事故、加害者の男、雪によって点字ブロックが消されてしまったこと——そのために男が……内容のヒューマンな観点は評価するとして、なぜ推理的な仕立てを用いたのか。それは却って読み手の理解を遠回りさせたような気がする。

「無垢なる子宮」西村修子

美大に集まった学生たちの、若い性の目覚めと教授たちのどこか狡猾さ、揺れる気分、モデルへのまなざし、芸術の対象への考察……そこまではアーティストたちの青春の揺籃期として読めた。しかし主人公の出自と旧家族が、唐突というかバランスを欠いたように感じられた。(「サエコは実の母親が駆け落ちして出ていった直後、妙な病気に罹ったことがある。夏の風が鉄筋コンクリートの壁をすり抜けて冷たい風に変わり、全身が凍りつくような激しい寒さに見舞われるのだ。その感覚が今でも時々蘇る。’)とある。これが何なのか。また父親の後妻エミコ(主人公と年齢差もない)との葛藤(父親との性行為を見せつけるような)、それに対し、車のブレーキオイルに細工をし、そのため両親は事故死する(性行為の最中で死のような……

衝撃的ではあるが、かつて某映画のストーリーに既視感はあるような)。そして父親と後妻との間で生まれた障害を持つ娘カナとの関り、その成長(初潮)が出て来る……。テーマと描写に鋭さ生々しさは感じられるが、世の重すぎるテーマが部分的に混在している感を否めなかった。

「震災を越えて」高橋惟文

この賞でも数々の受賞をされてきた作者。とにかく登場人物たちの情を交えたダイナミクスを描く名手。そして、毎回舞台設定を見事に変容させている。今回は自動車販売の世界、それに9・11の東北大震災を絡めてもいる。曲がったことは嫌いな車のセールスマンが、上司の嘘の隠べいに我慢ができず退社する。しかしまた拾う神もいて、彼と情を共にできる社長(わけ有って服役したことがある)とも関わりができ、その繋がりで離ればなれになっていた恋人とも再会できる。その彼女とは、車のフロントガラスのエアコン吹き出し口にボールペンの筒の中に入れた手紙を通し、気持ちや伝え合っていた……それをかつて言い争った上司が持つていて最後に詫びと共に差し出してくれる、小粋な技も冴えている。

「テロの源流」風樹茂

かつての下町の塾、そこで講師をする主人公、ニュージャージー出身の巨漢とベトナム出身の国費留学生の二人も、そこでアルバイトをしている。一方、集まってきた生

徒たちは中学生ながら、柄は相当なもので、頭は良いがい加減な態度で講師を馬鹿にしてくる者、講師を挑発する女子……など、悍ましさのリアリティがけっこう読ませ伝わってくる。そんなある種の「教育戦場現場レポート」のようにも感じられた。(「中学二年の教室からは講師のヒステリックな怒鳴り声のあとに、生徒たちの残忍な笑い声が聞こえてきた……新たな一四歳たちが、講師を自らの充たされない欲望のはけ口になっているに違いなかった」と。

ラスト、後年、ある科学の学会の中に、ベトナム出身の元講師に似た顔を見た——というシーンは一瞬の救いに思えた。タイトルはちょっと伝わらなかったが。

「バイバイ、グッド・ラック」国梓としひで

沖縄の戦後間もなくの頃、黒人を父親に持つ少年が主人公の話。一人の仲間の少女がアメリカへ養女として行ってしまう。後年、映像作家として沖縄戦のドキュメント映像を収集する立場に主人公は育っている。とある閉館する映画館で記念上映があり、その際、病気に冒された姿のかつての少女が映っているのを発見する。当時流行っていた少年探偵団にあやかり、仲間として「センター少年探偵団」を結成し少女もその仲間になったのだ。呼笛の音が確かに効いている……：評者も、その歌は今でも時々歌っている(笑)。胸にしみる作品だった。

「マジックヒューズ」山田明

病棟の調理室での、調理師の男と日系三世の母とユダヤ系米国人の父をもつナースとのやりとり……。主人公は彼女から、手中に収まる古びた銀色のクルスを渡される。彼女の祖父は従軍牧師で、沖縄戦で護衛空母に乗艦していた時、マジックヒューズで撃ち落とされたカミカゼの青年が足元に倒れた……クルスはその機体の破片から加工して作られたものだ。……よく分からない小説だった、でもこのタイトルから発せられる「何か」が命の深い層を伝わってくる気がした。

「ゴーストバスター」中野雅丈

新聞記事校閲者の若い女性の話。その普通では見えない世界の仕事を淡々とよく描いている。データの部分が、不思議に新鮮だった。花結びの色の濃淡の誤植に気づいた場面もなかなかだった。

「独り、壊れていく」高橋ひとみ

認知症になった女性の思いを内側から描いている。この作者ならではの体験から来る臨場感が、伝わってくる。

「双眼鏡」松本りゅうじ

妻子を交通事故で亡くした男が、ギャンブルにはまり、女(ナミエ)の世話になっている。その女は火事が好きで、消防車の音が聞こえると部屋の窓を開け、双眼鏡で見まわす。一方男は、前に付き合っていた女と寄りかたを戻し新しい住まいに住もうと思出す……：ところが、その家が燃えて

しまう、(そのときナミエの穿いているデニムのパンツから灯油の臭いがした)。男はこいつが放火したに違いないと気づく——面白く作られた作品だ。

「青春の彷徨」折口真

警察学校の訓練生時代の話、ストリートに良く描けている。入隊試験の身体検査時、医者にペニスを掴まれショックを受ける。志を持って入ってきた同僚が辞めてしまい、それほど強い思いのなかった自分が残った事に、人生の不可解さを感じたりもする。ラストがある意味、警察官の集団の内面を垣間見せてくれるようだ。(太陽の陽ざしを受けながら、胸元にツーと汗が流れていく。私は番犬に追い立てられる羊のように、分隊の動きに従って黙々と訓練に従事していた。しかし、心は彷徨える羊のままだった。見えない相手に向かってひたすら警棒を押し上げながら、その時ふっと、白衣の男に掴み取られたのは、私の肉体と魂の存在だと確信した」と。

「セピアの溪」根岸幸晏

山に思いを掛けた女性の話、登山と情景の描写は中々だ。しかし、ストーリーとして、助けてくれた男性と不倫に走りその男性が自死に近い形で命を失っていくというのは、何か読んでいて湧きあがるものが感じられなかった。

「一粒の実りを願って」荘ゆりこ

人工授精の経緯が刻銘にひたすら記されている。小説と

してより、実録的な感覚として優れているとは思われた。

「右手」邑崎龍哉

工務店の父親と、息子兄弟の人生。淡々とよく描けているとは思われる。視点を兄と弟と双方からのものにしていく所に特徴を感じた。

「大回り」高杉晋太郎

小さな印刷会社をやっていた男。妻は入院し、子どもたちからは金を貸して欲しいとせがまれる。六十歳前で定職を失い、支給される生活保護費で細々と暮らす。糖尿病にもなり、妻も亡くす。それでも人生の元は取れた、生きていくだけでありがたいと思う主人公、何という慎ましさ——に少し打たれた。

「怪雨」中崎紫紅

学生運動時代の話。仲の良かった、男性二人と女性の三人仲間、その人生の変遷を描いている。主人公は学生時代、小競り合いの中で警察隊に左足を殴られ、それが尾を引いて行く。それから結婚し、東京で家庭ももつ。かつての仲間だった男性は、企業ビルの爆破事件を起こし命を失った。一方女性仲間は司法試験に受かり検事になっていった。事実に近い話があるかもしれないが、もう少しテーマが絞られることを期待したい。

「未遂」沢村基

祖母と言っても後妻だったので、孫の主人公とは血が繋

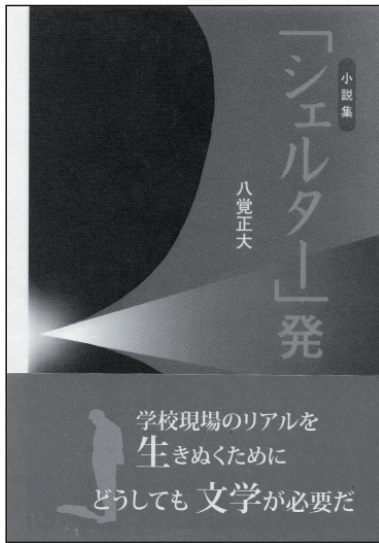
がっていないなかった。主人公が幼い時、赤ちゃんの扱いを知らない祖母のため、空腹で死にかけたことがあった。祖母はそれをずっと悪く思っていた……大きな展開はないが命の繋がりは描けていると思われる。

「ある傷痕軍人の戦後」西山慶尚

友人の父親は傷痕軍人で、友人からその話を聴く主人公。状況はさすがの筆者、よく描かれている。その父親が、自分の幼い息子が赤痢で死んだときは泣かなかつたのに、なぜか道で死んでいた猫を抱えて来て、上り口の板の間で号泣した、という話は印象に残った。

「雨女」室町眞

かつて雨女と言われた女性が、気象予報士になる話。力のある常連の筆者の、器用に造った作品と感ぜられた。



けやき出版 1500円(税込)



選考会風景 2022.11.8 「サロン・ド・八覚」にて